琉球大学学術リポジトリ

シテシマウのムード的な意味

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2016-05-10 キーワード (Ja): シテシマウ, ムード的な意味, 意外性, 人称, テンス キーワード (En): Shiteshimau, Modal meaning, Unexpectedness, Person, Tense 作成者: 渡真利, 聖子, Tomari, Seiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33826

琉球大学留学生センター紀要
第 3 号，2016

シテシマウのムード的な意味

渡真利　聖子

要　旨

本稿では、シテシマウのムード的な側面の感情・評価性に焦点をあて、まず、個々の用例の表す感情・評価的な特徴を示した。シテシマウの感情・評価的な特徴は、ムード、人称性、テンスによって異なる。＜ものがたり文＞をつくる叙述法であれば、嘆き、後悔、困惑といった否定的な態度が多いが、喜びや満足感といった肯定的な態度を表す場合もある。＜まちのぞみ文＞をつくる勧誘・意志法や＜さそいかけ文＞をつくる命令法であれば、出来事の実現が好ましいといった肯定的な態度で聞き手に促しや指示をする。また、テンスの観点からみると、忠告や非難、不満といった否定的な態度を表す例は過去形よりも非過去形の場合に多いことが明らかとなった。シテシマウが表すこれらのさまざまな態度を考察した上で、この形式に共通するムード的な意味は＜意外性＞であるということを述べた。＜意外性＞とは、基本的に話し手の立場からのさしだされる出来事に対する評価であるが、二人称、三人称の文の場合は、話し手が聞き手や第三者の立場にたって＜意外性＞を表現している例もあることがわかった。

【キーワード】シテシマウ、ムード的な意味、意外性、人称、テンス

0. はじめに

本稿の記述の対象であるシテシマウとは、動詞に補助動詞「しまう」のついた形をさす。「～しまう」「～しまった」「～しまおう」「～しまえ」等、その形態的なバリエーションをまとめて、本稿ではシテシマウと呼び、個々の形については前述のように括弧つきひらがな表記で示すことにする。なお、今回は従属文の述語のものについては調査の対象から外し、単文ならびに複文の主文の終止の位置にくるシテシマウについてのみ扱うことにする[1]。

シテシマウの用例は、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）』オンライン版「中納言」（以下、BCCWJ-NT）を使用し収集した。今回分析した用例は、1990 年代から 2000 年代に出版物として刊行されたものからの例（公開済みの WEB 上の文書も一部含む）に限定した。

1. 研究の目的と方法

シテシマウに関する研究が数多くある中、ムード的な側面について触れている先行研究では、いずれもシテシマウがムード的な意味[2]のみを表す形式ということではなく、アスペクト的な側面も認めながら、何らかの感情・評価的なものも表していることが指摘されている（吉川 1973、杉本 1991、杉本 1992、藤井 1992、鈴木 1998 など）。

藤井（1992）では、ものがたり文[3]のシテシマウの感情・評価的な態度について人称別に記述している。その中で、シテシマウを「主体の動作や変化や状態の実現あるいは終了を、しくじり、不都合としてとらえる話し手の評価、失望、困惑、感慨としてとらえる話し手の感情を表している」としている。さらに、この話し手の感情・評価的な態度には、限界達成というアスペクト的な意味がつきまとっているようであると指摘し、シテシマウがムード的な性格とアスペクト的な性格の複合性を持っていることを認めている。

> 「してしまう」という形の基本的な意味を規定するとすれば、＜限界達成にともなうところの感情・評価の表現＞という複合性のなかにもとめなければならなくなるだろう。（藤井 1992：27）

また、動詞の種類別にムード的な側面である＜感情・評価性＞の表れ方の強さが異なることも指摘している。藤井（1992）によれば、限界動詞は語彙的な意味にすでに限界を表しているので、シテシマウ形で限界達成を表す必要はなく、なんらかの感情あるいは評価の表現としてはたらくとし、シテシマウの意味についてアスペクト的な側面が基本ではないと捉えている。一方で、ポテンシャルな限界動詞の場合は、かならずしも感情・評価の表現者ではなくなり、アスペクト的にはたらくとも述べている（藤井 1992：25-26）。

本稿では、先行研究で指摘されているシテシマウの文法的な意味におけるムードとアスペクトの複合性について認めつつ、この形式のムード的な側面のほうに焦点をあて、用例を示しながら、シテシマウの表す感情・評価性について記述していくことにする。

本稿で考察するムード的な意味とは、この文のモダリティーの一つの要素であると考える。モダリティーとは、「《私》のたちばからする、対象的な内容と現実との関係のし方」（奥田 1984：240）である。モダリティーは、述語になる単語のムードの形を中心に表されるものであるので、シテシマウのムードの形別にこれらの形式を見ていくことにする。

また、話し手《私》と文の対象的な内容と現実との関係という観点でいえば、文の時間性や文の人称性も、モダリティーとならんで文の陳述性を担う重要な文法的な要素である。モダリティーというのは、基本的に話し手のものであるが、シテシマウがさしだ

す動作・変化・状態は、話し手のものもあれば、聞き手のもの、また第三者や物事の場合もある。つまり、話し手がある動作・変化・状態に対して何らかの感情・評価をしめす際に、その動作・変化・状態が自分自身のものであるか、あるいは聞き手ものか、第三者のものであるかにより、その性質も変わってくる可能性があるのである。藤井（1992）もこのことに注目し、文の人称性を分析の観点に取り入れている。このことはテンスについても同様である。シテシマウには「してしまう（してしまいます)」と「してしまった（してしまいました)」のテンスの対立もあり、さしだされる動作・変化・状態が実現済みかどうかを表しわけている。話し手が認識するその事態が実現済みかそうでないかによって､その事態に対する＜感情･評価＞はかわってくることが予想される。

以上のことから、本稿でシテシマウのムード的な意味を考察していく手順として、シテシマウのムード、そしてテンス、文の人称性を分析の観点に入れ、それらの要素別に用例を示し、この形式の表す感情・評価性について述べていくことにする。

2. シテシマウのムード的な意味

今回、BCCWJ-NT を使用した調査では、＜ものがたり文＞の述語となる叙述法断定の用例は、27,063 例であった。そのうち非過去形「してしまう（してしまいます)」は 12,835 例、過去形「してしまった（してしまいました）」は 14,228 例であった。＜まちのぞみ文＞の述語となる勧誘・意志法「してしまおう（してしまいましょう)」は 171 例、＜さそいかけ文＞の述語となる命令法「してしまえ」は 52 例であった。

2.1. 叙述法過去形「してしまった」のムード的な意味

すでに実現済みである出来事をさしだしている叙述法過去形「してしまった（してしまいました)」は、個別具体的な内容が多いという点で非過去形の場合と異なる。このことから、まずは、非過去形よりもアクチュアル性の高い用例が多い過去形について、以下、人称別に記述する。

2.1.1. 一人称過去形の場合

「してしまった（してしまいました)」を述語に持つ文が一人称の場合では、話し手自身の実現済みの動作に対する、話し手の嘆き、後悔、困惑、驚きなどの態度を表す。

話し手の意志とは関係なく起こる動作・変化・状態をさしだす場合、それらの事態がひとたび実現すると元に戻すことができない、後戻りができないというような状況であり、シテシマウという形で否定的な感情・評価を表すことが多い。

1)　「はい、あなたも何かどうぞ」
　そう言って誰か、私にもグラスを差し出してくれた人がいた。
「ありがとうございま…あ！」
言いかけて思わず声を**だしてしまった**。彼女だったのだ！
「ああ…まえにも一度会ってましたね。どうも、こんばんは。私、神野真知子といいます。さあどうぞ」
彼女は微笑んで、もう一度グラスを私の手にのせなおした。（悩ましいほどおしゃれな恋を）

2)　高鷲が犯罪に荷担したことは神崎から聞いたが、その経緯を自分は知らない。
「話してくれないか。なぜ、あなたが神崎たちの計画に手を貸すことになったのか」
高鷲は髪を撫でながら、言った。
「私は六年前の内陸旅行中に判断を誤り、オブザーバーに重傷を**負わせてしまった**。その事故のことは知っているな？」（サスツルギの亡霊）

3)　監房の壁は緑の黴の厚い層によって覆われており、右の壁は水の小さな流れが走り、壁の湿気で膨らんだ割れ目やくぼみの中を滴り落ち、壁から離れて、床の上に雫を落とした。一定の間隔をおいて、ポトン、ポトン、ポトンという音が聞こえてきた。板寝床に這い上がった私は**寝入ってしまった** 。私が寝ているのに気がつくと、看守は私を起こして、昼間は寝てはいけないことになっていると警告した。私は夢うつつに何かを呟いたが、またすぐに**寝入ってしまった**。（夫ブハーリンの想い出）

シテシマウの意味として、否定的な態度を表すものが多いと言われる（藤井 1992 など）が、実際の用例には否定的な態度とはとれないものもある。

4)　五月には『或村の近世史』が、社会科学書の出版で名のとおる聚英閣から出た。　これが呼び水になって至上社のポケット・ライブラリイに『農村問題原理』を書くことになった。日頃あたためてきた問題である。筆が面白いくらいに走った。四百字詰百三十枚ほどの小著だが、半月あまりで**書き上げてしまった**。九月にはもう本になった。（われ山に帰る）

5)　八月三十一日　土曜日（晴曇雨）　長い夏休みも、もうすみました。夏休みの間、家では重い病気にかかった人は、一人もありません。昼から庭のすみにある草をぬいたり、草をかったり、どぶそうじをしたり、おそうじをしました。夕方に少し雨がふりました。今日で夏休みのしゅくだいを皆**仕上げてしまいました**。しゅくだいを皆したのでほっとしました。（昭和二十一年八月の絵日記）

6)　表面は陽気に振舞いながらも苛立ちを掩いきれなかった時期とはまったくちがった充足感が、昭和三十年の日記には感じられる。少年時代からの夢想を自分はこと

ごとく成就したとまで、彼はここでいっている。

「大體において、私は少年時代に夢みたことをみんなやつてしまつた。少年時代の空想を、何ものかの恵みと劫罰とによつて、全部成就してしまつた。唯一つ、英雄たらんと夢みたことを除いて。

ほかに人生にやることが何があるか。（三島由紀夫の世界）

7) 翌日、僕は学校に行くと、誰かれにとなくビートルズのことを話した。知っているものがいると僕は感激して、その子といつまでもビートルズのことを話した。それまであまり好きでなかった友達でも、ビートルズを好きだというだけですっかり見方が変わってしまった。

とくにノッポの森本勇はビートルズを理解していたし、僕よりもずっとビートルズを知っていた。にわかにノッポの勇に対する僕の印象はよくなった。（かまち）

8) 同僚の大館先生の影響でキノコに関心を持ち始めていた頃で、下山途中、箒茸と花びら茸を見つけた時は、その立派なことにも興奮してしまいました。味もなかなかおいしい茸でした。（明日のおもいで）

上の 4)～8) の例からは、後悔や困惑などの感情は感じられない。藤井（1992）において、意図的に努力して行う話し手の動作が実現した場合や、同じく 1 人称で意図的でない場合においても話し手が喜びや満足感を抱いている例が挙げられている。これらの例を見ると、否定的な感情・評価の場合でも、肯定的な感情・評価の場合でも、共通する点は＜意外性＞である。ここでいう＜意外性＞とは、話し手がそれまでに予測しなかった、あるいは期待していなかった結果に対する評価である。用例では、確かに否定的な感情・評価をともなうものが多いのであるが、話し手にとっての好ましくない、不都合なものであるがゆえに、出来事が起こる以前には出来事の実現について期待せず、実現したとすれば、それは話し手にとって意外なことなのである。

2.1.2. 二人称過去形の場合

二人称の場合は、感情・評価の主体と、シテシマウでさしだされる動作・変化・状態の主体が異なる。先に、シテシマウの表す＜感情・評価性＞は話し手のものであると述べた。確かに、二人称の「してしまった」の用例を見ると、目の前の相手の動作・変化の実現が話し手にとって好ましくないもの、不都合なものとして話し手の否定的な感情・評価的な態度が表される場合（例 9）もあるが、一方で、動作・変化・状態の主である聞き手にとって好ましくないもの、不都合なものだと話し手が推測し、あるいは聞き手の立場に寄り添い、否定的な感情・評価が表される場合（例 10）がある。どちらにしても、二人称過去形の場合は、話し手が聞き手を非難したり、脅迫したりするはたらきをもっている。これまでに二人称過去形の例で、肯定的な感情・評価を表しているも

のは見つかっていない。

9)　なんといっても一度は好ましいと思った女のことこんなふうに、追いつめるようなまねはしたくなかった。しかしあくまでそうつっぱるなら仕方がない。いいですか、お竜さん。あのとき、死体の消えた前後に、あなたはどうしました。死体を発見して、おどろいているぼくたちに、あたしがひとつ、そのへんにエーリアンがおらぬかどうか見てこようと、一人だけ姿を**消してしまった**。

　そしてぼくたちがケンジョーの死体もろとも戻ってみたら、もうフクダの死体は消えていた。そしてあわててぼくたちがさがしに行く間にこんどはケンジョーの死体が消えた。二度とも、死体を誰にも気づかれず始末できたのは、お竜さん、あなたとダイバッカのどちらかしかいなかったではないですか。（エーリアン殺人事件）

10)　「すべて当事者の証言や記録があるんですよ。あなたの御主人、前の御主人は奥の物干し台から脱出した。これも本人の書いた報告書にあります。あなたは革命の功労者なのです」

　彼は引き続き、誘い水を撒いた。婦人は鼻を鳴らして、軽く笑った。

「あなたは御主人の逃亡を手助けしたが、張り込み中の私服刑事に**捕まってしまった**！」

　彼は感嘆の声を上げた。これも調査のテクニックだ。

「すべて御存知なら、調査の必要はないでしょう？」

　婦人は目を開き、突然大声で反問した。（ある男の聖書）

　過去形でさしだされる動作のし手が二人称の場合、使役動詞に「しまう」がついた「させてしまう」という例がいくつか見られた。この場合の「させてしまう」は、話し手または第三者にとっては望ましくない、好ましくない動作であることを表し、使役動作のし手である聞き手がそれを強いたという非難のニュアンスを表し、はたらきかけ文的にはたらいている。

11)　…なくなった斎藤に探偵趣味を吹きこんだのは、あなただったわね。斎藤にはもともとその素質があった。ですから、あなたにとっては絶好の傀儡だったのよ。

　そして、あなたは、あの人を犯罪手段の研究に熱中させ、架空犯人のトリックに**心酔させてしまった**。

　むろん斎藤の方で夢中になったんだけれど、あなたは実に微妙な技巧で、斎藤の物の考え方をその方向に導いて行ったのよ。話術でしょうか。いや、話術よりももっと奥のものね。あなたはそれで斎藤を自由に扱いこなした。（三角館の恐怖）

2.1.3. 三人称過去形の場合

三人称の「してしまった（してしまいました）」の場合、第三者の動作・変化・状態が実現したことに対する、話し手（語り手）の嘆き、失望、不満などの感情がうかがえる。自分にとって好ましくないもの、不都合なものであるという否定的に評価とともに、出来事の実現に対する＜意外性＞を表している。

12）照明弾は跳ね返ってデッキに落ち、シューシューいいながら海中に転げ落ちていった。ジェイはピストルに装弾し直そうとしたが、赤い薬包を**取り落としてしまった**。拾い上げようとしてかがみ込み、肉切り包丁を置いた。ところが、薬包はあわてふためく彼の手をすり抜けて転がっていき、コックピットの床をコロコロと逃げまわった。（アルバトロスの血）

13）…スイス、ドイツ、などを除くヨーロッパの国では、そのような過程を経て経済が完全に**沈滞してしまった**。
　国際競争力も大きく**落ちてしまった**。政府主導の国は税金も高い。所得の半分は国に召しあげられる。（新・国富論）

14）せっかく話題を変えるつもりで持ち出した話も、やはり苦い結末に**なってしまった**。私は、鼻の奥に痛みを感じた。（蟹の町）

次の例は肯定的な感情・評価を表している。第三者の変化の実現が好ましいものであり、それに対する驚きを表している。語りの文であるが、登場人物の一人が想像していなかった出来事の実現をさしだし、語り手が登場人物の立場に立ち、その実現に対する＜意外性＞を表している。上に挙げた否定的な感情・評価を表す場合と共通するところは、やはり＜意外性＞という意味においてである。

15）レイチェルはぴったりしたサイズのジーンズをはき、襟と袖口にフリルのついた淡い桃色のブラウスを着ていた。きれいに化粧をして、髪をカールさせている。びっくりするほど変わった。まさにジョン好みの女性に**変貌してしまった**。ジョンもジーンズをはき、グレーのセーターとスェードのジャケットを着ていた。なによりも変ったのは顔だ。きれいに髭を剃り、少なくとも十歳は若がえって見える。（最後のゲーム）

2.2. 叙述法非過去形「してしまう」のムード的な意味

ここからは非過去形「してしまう」のムード的な意味について、人称別に述べる。非過去形「してしまう」は、今回の調査では単純に未来の個別具体的な動作・変化・状態をさしだしているものは見当たらず、特に語りの文などでは、物語の流れにそって、発

話時現在（＝語り時現在）、出来事が目の前で起こっているかのように継起的に述べ立てていく際に使用されるものが多かった。また、会話文でも「～たら…」「～ば…」「～と…」のような条件文の中で使われていたり、習慣や性質のような恒常的なものであったりするなど、さしだされる動作・変化・状態はポテンシャルなものが多かった。さしだされる動作・変化・状態がポテンシャルなものであっても、アクチュアルに、個別具体的に実現される場合と同様、この形によって感情・評価が表されている。

2.2.1. 一人称非過去形の場合

非過去形一人称の「してしまう」では、非過去形でありながら、現実には発話時現在とほぼ同時にあるいは直前に始まりの限界をこえた動作・変化・状態をさしだし、その限界到達が話し手にとっては不都合なものである、意外なことであるということが表されている。三つ目の「（千三百メートルまでも）上がってしまう」は、否定的な態度とはいえないものであるが、これまで挙げてきた肯定的な感情・評価の驚き、喜びのような態度とも少し異なる。しかし、「千三百メートル」という高さを「楽に上がる」という点で、やはり＜意外性＞という意味をもっていると考えられる。

16）「最近《ビジネス》誌のアンケートを読んだの。《われわれの知識人層の現状》について。あなたの名前はあげられていなかったわ」
「そいつは重大だ。深刻だ。ふるえてしまう！われわれの知識人層だって！なんという所有形容詞！われわれの女たちはどうなった？われわれの植民地は？われわれの召使は？」（ゆるぎなき心）

17）「気があったりして、あんたに。最初からあんたを狙ってた？」
は！？思いがけない文緒の言葉に呆れてしまう。が、まんざら嫌な気分はしない。
「バーカ」
「冗談だって。フフ、元気出たじゃん」
二人で顔を見合わせて笑った。（フレンズ）

18）翌朝宿のすぐ横上から第１リフトで五分、第２リフトに乗り継ぎ十五分。途中燃えるようなカエデ、ブナの紅黄葉がみごとで、気分を盛りたててくれる。第３リフトは今回は工事中で、その分樹林の中のぬかるんだ道を三十分歩くことになる。本来なら千三百メートルまでも楽に上がってしまう。林相もすっかり変わり、オオシラビソとダケカンバの樹海が一面に広がる。落葉したダケカンバの白く光るのが殊さら美しい。（女性のための百名山）

一人称非過去形の使用の中で否定的な感情・評価を表す場合、語用的に聞き手への非難、脅迫などとしてはたらくこともあると藤井（1992）で指摘されている。この場合、

一人称の動作・変化・状態は聞き手のある行動によって引き出されたものであり、聞き手と関係のある動作･変化･状態であるからこそそのようなはたらきができるのである。このような使用は過去形の場合にもあるが、非過去形の場合は、具体的な実現済みの事態ではなく、話し手の想像によってそのような事態が実現するのではないかという懸念を表している。17)の用例は藤井（1992）からのものである。

19) 「あれじゃ、まるでわたしが悪者に**なってしまう**じゃないか。あの事件ではあんたのためにわたしはずいぶん苦労をしたんだよ。ああいう話をされると、わたしは白井鉄三をなぐっただけの軽はくな人間に**なってしまう**じゃないか」（兎の眼）

20) 女は私と向かい合わせに坐って、笑い声をあげた。
—そう言えば、まだあなたにお伝えしていなかったのね。死んだ夫が生き返ったかとお思いになった？今さらそんなことが起きたら、**困ってしまう**。あれから今のひとと知りあって、ここに住んでもらうことになったんです。もう三年めになります。かれが病気じゃなければ、あなたにご紹介できたんですけど。（私）

2.2.2. 二人称非過去形の場合

非過去形二人称の「してしまう」の場合、聞き手の動作・変化・状態が実現することが、話し手にとって好ましくないもの、不都合なものであるという否定的な感情・評価が表されている。はじめの例のように仮定の出来事をさしだしている場合は、聞き手への忠告として、あとの例の習慣の場合は、聞き手への非難として機能している。二人称非過去の例で、肯定的な感情・評価を表す例は見当たらなかった。

21) 「でも、これ以上、あたしはあなたと一緒に行けない。一緒に行けば、あなたはあたしを庇って、また**傷ついてしまう**。そしてあいつに—あなたが絶対に負けちゃいけない奴に負けてしまうことになる」（トリニティ・ブラッド）

22) 「…だから、今ここで答えてほしいの。こういう場所なら、あなたも逃げ場がないでしょう」
「おいおい、何が望みだい？」
皮肉っぽい声で新自は言い返した。
「ぼくと縒りを戻したいのか。それならそうと、はっきり言えよ」
「そんなことは言っていないわ！」
美紀は激しい声をあげた。
「あなたはいつもそう。そういう言い方で、答えを**はぐらかしてしまう**。あたしはいつだってあなたに逃げられてきた。だから、もう逃げないでちょうだい。この質問に答えてさえくれたら、あたしはもう何も言わないし、これ以上あなたを悩ます

こともしないから」（ネヌウェンラーの密室）

2.2.3. 三人称非過去形の場合

はじめの例は、作品の語りの中での「してしまう」であり、主人公の視点で語られているものである。他の登場人物のアクチュアルな動作がさしだされているのであるが、いずれも発話された時には実現済みのものである。非過去形を使用することで現在まさに目の前で出来事が進行しているかのような効果を出しているのである。一つ目の例は動作の始まりや終わりの限界に達していることを表しており、それが話し手にとって不都合なものであるということがこの形式によって表されている。二つ目の例は「～ば」の文のいいおわりの述語であり、非アクチュアルであるが、仮定として「墜落する」ことが実現することが話し手にとって不都合なものであることが表されている。三つ目の例は、先の２例の否定的な感情・評価と異なり、肯定的な感情・評価の例である。自分にはできないことを目の前の料理人がしたことに対しての話し手自身の驚きを表している。以上の態度も、＜意外性＞という意味のもとに表されるニュアンスであると言える。

23) 「まいったな。そんなんじゃ、電車なんか乗れないな。…ちょっと、そこのサテンで休んでから行くか」
「…」
辰巳コーチは、エンジンを切って、バイクから降りると、さっさと駅の横にある喫茶店の方に**歩いて行ってしまう**。バカ…。わたし、泣いてるんだから。泣いてる女の子、放り出して、そうやってひとりでとっとと行ってしまわないでよ。だけど、結局、わたしは、辰巳コーチのあとを追うようにしてついて行くしかなくて。いかにも駅前の喫茶店ってカンジの、殺風景なお店だった。辰巳コーチは、黙って、ドカッと**腰を降ろしてしまう**。（大人の恋にあこがれて）

24) 「だめだ。この低空で急激な引き起こしをかけたりしたら、翼端失速を起こして**墜落してしまう**！」
「こうなったらイチかバチかだ」（鉄甲巨兵 some-line）

25) かまどで使っていると鍋はすぐにススで真っ黒になるから、私はとうにあきらめていたが、このへんが料理人の心意気というところか。タライぐらいあるずんどう型の洗面器のような鍋（アルミニウム製で、大きさはいろいろ）が、かまどの上でグラグラ煮立っているのを、ヒョイと素手で**つかんで下ろしてしまう**。私にはとうてい真似のできない熟練の度合だ。（アフリカポレポレ）

2.3. 叙述法以外のシテシマウのムード的な意味

シテシマウには、以上で見てきた叙述法以外にも、勧誘・意志法、命令法の形がある。

叙述法「してしまう（してしまいます)」「してしまった（してしまいました)」の場合と異なり、勧誘・意志法「してしまおう（してしまいましょう)」や命令法「してしまえ」は、さしだされる動作・変化・状態の実現に対して、肯定的な感情・評価が表れる。ここでは、勧誘・意志法「してしまおう（してしまいましょう)」と命令法「してしまえ」の他、シテシマウを含むはたらきかけの表現「してしまいなさい」「しておしまい」「してしまってください」についても述べる。

2.3.1. 勧誘・意志法「してしまおう」

勧誘・意志法の「してしまおう（してしまいましょう)」では、話し手自身が思い切ってそれを実現させるという、積極的な意志が表明されている。あるいは、聞き手に強い意志をもってそれを実現するようさそいかけている。したがって、「してしまおう」によってさしだされる事態も意志的な動作についてであり、その動作の実現に対しての話し手の肯定的な感情・評価が表されている。ここでは、否定的な感情・評価はなく、むしろそれをできるだけ早く実現させることが望ましいという肯定的な態度が表れている。「しまう」がつかない「しよう（しましょう)」との違いについてみると、「してしまおう」が使用される場面のほうが、さしだされる動作・変化・状態が、実現するのにいくらか労を要するようなものであることがわかる。

26) フランスに着いた日は、灰色の空から小ぬか雨が降っていた。混雑した夜行のフェリーを乗り継いで、さほど拘束されずにすむ車の旅に変わったときは、ようやくほっとした。途中、何事もなくドーヴィルの〈オテル・ド・ゴルフ〉に到着し、荷物をほどくとすぐに、彼女は戦没者共同墓地への道順をフロント係に尋ねた。まずは肝心なことを<u>すませてしまおう</u>。先にアリバイを作っておかなければ。墓地はホテルから車でわずか五分のところだった。（仕組まれた再会）

27) 「それも“計画”の一部だったのだよ。君を日本へおびき寄せることも、ね」
　意外な冠木の言葉に、晶人は目を見開いた。
「なに…？」
「ふふん。無駄な時間を省くために、手っとり早く君に<u>訊いてしまおう</u>。仮面武闘者は、〈暦の石〉をどのように用いて、ふたつの世界の位相が接近する時期と場所を算出するのかね？」
「訊かれて、おれが答えると思うのか？」
　晶人は、唇にふてぶてしい笑みを浮かべながら訊き返した。（不死蝶めざめる）

「してしまおう」は基本的に一人称で使用され、ムード的な意味としては話し手の意志の表明であるが、中には、聞き手の動作をさしだし、その動作の限界達成（実現）を

聞き手に促す例もある。この場合は、話し手の動作・変化・状態の実現にむけての意志表明ではなく、聞き手への＜さそいかけ＞としてはたらいている。次の例は、話し手の男が聞き手の女に対し、女の身の上にあった出来事を詳しく聞かせてほしいと促しているところである。

28）女　「そう、…もうこのあとは冗談ではないわ…怖かった。あたし今でも怖い」
　男　「僕だって、これからあとの話は、あまりいい気持がしないね。しかし、**話してしまおう**。この無人境の崖の上で、一度だけおさらいをしよう。そうすれば、君だって、いくらか気分が軽くなるかも知れないぜ」
　女　「ええ、あたしもそう思うの。…（略）」（三角館の恐怖）

2.3.2. 命令法「してしまえ」

命令法「してしまえ」は基本的に二人称で使用される。勧誘・意志法と同様に、話し手の感情・評価としては、否定的なものではなく、聞き手のその動作に対して肯定的な、積極的な感情・評価となっており、聞き手にその動作・変化の実現をうながしている。「しまう」がつかない命令法「しろ」との違いについてみると、この場合も勧誘・意志法と同様で、聞き手自身にとっては実現が困難な、あるいは躊躇してしまうような状況での動作・変化の場合に使用されている。

29）…サーカスの芸人のように。ロビーの床までは五層吹きぬけ、二十メートル近くあるだろう。その空中を、若きエリート警察官僚は一輪車で渡っていくのだった。
　「いそげ、岸本！」
　「がんばってください、岸本警部補！」
　「もうすこしですよう」
　無責任なようだが、声援する以外、私たちには何もできない。
　「いまさら引き返せないぞ。そのまま**渡ってしまえ**！」
　吹きぬけの空間は長方形をしている。幅は二十メートルくらいだが、前後の長さが五十メートルほどあって、ちょうどその中央あたりの空中で岸本の一輪車は停止してしまっていた。岸本は前を向き後ろを向いて、絶望のウメキをあげた。
　「ひえー、ひえー、ひえー」
　「さっさと**渡ってしまえ**ったら！」
　「そ、そんな、…」（クレオパトラの葬送　薬師寺涼子の怪奇事件簿）

命令法としては「してしまいなさい」という形もある。これらも「してしまえ」と同様、動作主の聞き手にとっては実現が困難な、あるいは面倒なことに対して、話し手は

その動作実現を聞き手に促している。

30）母　「どうして、こんなになるまで遊んでくるの。あなたは中学生でしょ。少しは考えなさいよ。まったくもう」
僕　「たまにはいいじゃないか。いつもいつも勉強勉強とうるさいんだから、たまにはおもいっきり遊んだっていいじゃないか」
母　「そんな遊んでいるひまがあったら、さっさと宿題を**やってしまいなさい**」
僕　「少しは、遊ばせろ」（いま、子供たちが変だ）

31）つまり、サラリーマンにとって転職や独立は非現実的な話。だから、イヤなことがあったら**辞めてしまいなさい**とか、会社生活の束縛から解き放たれたらすごく楽ですよ、というような調子ですべてを片づけては、机上の空論のオンパレードになってしまう。それよりも、会社を辞めずにどうやって日常的なストレスを減らすか、というアイデアをこの連載でいろいろ提案していこう、というのが当初の趣旨でした。（正しい会社の辞め方教えます）

命令法では基本的に意志動詞が用いられるが、次の例のように聞き手自身でもコントロールできない無意志的な自身の変化を表す動詞が使用される場合は、＜うながし＞というより、話し手の＜希望の表明＞としてはたらいている。

32）おとなしく自分らの巣に戻ってろ。いや、馬鹿が増えるだけだから、さっさと**駆除されて絶えてしまえ**。（先輩とぼく）

2.3.3. その他のさそいかけの表現「してしまってください」

シテシマウには、「してしまってください」という形でも使用される。聞き手に動作・変化・状態の実現を＜指示＞しており、話し手のその動作に対する感情・評価としては否定的なものは見あたらなかった。他の勧誘・意志法、命令法と同様に、動作・変化・状態の主（聞き手）にとっては事態を実現するにはある程度努力を要するものや困難なもの、面倒なものである場合に使用されている。

33）犬の毛やフケを物理的に取り除く以外に方法は無いと思います。ドアを目いっぱい開け放って、布団たたきなどでイスの全面を叩いた跡に掃除機を何度も掛けて**吸い取ってしまってください**。それでもダメなら、扇風機で風邪を送りながら叩くなど考えうる手段を全部使って、毛やフケを車内から取り除いてください。（Yahoo!知恵袋）

縮約形の「しちゃってください」の場合、現実的にはそれほど努力を要しなくても実現可能なものでも使用されている例もある。しかし、これらは、動作のし手である聞き手が一瞬躊躇したり思いつかなかったりするものであることから、聞き手にとっては意外性があり、話し手は聞き手へ思いきりさや強い意志をもってその動作等を実行するように勧めていると思われる。このような使用は、今回収集した用例の中ではブログや知恵袋などの比較的カジュアルな文体の中でよく見られた。

34）出品数が三千を超えたということで出品できないのですが、どうしたらいいのでしょうか？
終了分を**削除しちゃってください**。（Yahoo!知恵袋）

35）鼻が詰まってる時は危険なので思いっきり**くしゃみしちゃってください**。（Yahoo!知恵袋）

36）…そこに市政についての質問をしました。しかし一ヶ月以上返信がないので、再度メールしましたがやはり同じです。うっとおしいのはわかりますが、だったらメールアドレスなんか載せるな！って今度は電話で抗議してもいいでしょうか？それとも、もしも直接の担当部署でなければ、そのメールはCCせずに削除なんでしょうか？
電話の抗議はガンガン**しちゃってください**。メアド載せても、メールをチェックしていない部署は存在します。（Yahoo!知恵袋）

37）ちょっと自慢しました。御免なさい。
いいんですよ！どんどん**自慢しちゃってください**！！（Yahoo!知恵袋）

38）そちらに参戦するＤｅａｒｓの皆さまへ、たくさん盛り上がって**楽しんじゃってくださいね**。（Yahoo!ブログ）

39）まずは、タイ旅行と言えば象乗りといっても過言ではない（いや言い過ぎかもしれない気もするが）象のりです。日本の動物園じゃ象乗れませんもんね。タイに来たら一度は象に**乗っちゃってくださいね**。（Yahoo!ブログ）

3. シテシマウのムード的な意味のまとめ

第2節において、シテシマウの実例を示し、そのムード的な特徴を記述してきた。藤井(1992)等でも指摘されているとおり、シテシマウはアスペクトとムードの両面の性格を併せ持った形式であるという立場にたつが、本稿では、そのうちムード的な側面に焦点をあて、ムード、テンス、文の人称別にどのような特徴が表れるかを調べた。

叙述法過去形「してしまった」や叙述法非過去形「してしまう」が述語にくる＜ものがたり文＞の多くは、嘆き、後悔、困惑、不満といった否定的な態度を表すと言えるが、

一人称や三人称の場合は喜び、満足感といった肯定的な態度を表すものも見られた。否定的な態度の場合も、肯定的な態度の場合も、話し手あるいは聞き手や第三者といった動作・変化・状態の主が、出来事が実現する以前にはその実現について予想・期待をしておらず、それらの実現について話し手の立場から「意外である」と表現していることが共通点として挙げられる。現実的には、話し手ではなく聞き手にとっての＜意外性＞であると見えるものもあるが、シテシマウを使用することによって、これらも話し手が聞き手や第三者の立場にたち、出来事の実現についての＜意外性＞を表していると考えられる。

＜ものがたり文＞の中でさらに過去形と非過去形の異同をみると、非過去形「してしまう」の場合は、さしだされる出来事が、発話時点とほぼ同時に起こっているように表出的に表されているもの、あるいは物語の進行にそって前後の出来事と並べ継起的に表されるもの、また、条件文の主文の述語でポテンシャルな出来事がさしだされているものなどが多かった。この点で、過去形と非過去形がさしだす内容の質は異なる傾向であることが指摘できる。非過去形「してしまう」では、発話とほぼ同時に実現する出来事や未実現の出来事、あるいは仮定の出来事をさしだしながら、忠告、非難といったはたらきかけ的な話し手の態度が表されている例が過去形の場合よりも多いが、これらもムード的な意味としては＜意外性＞を表している点は、嘆き、後悔、驚きといった他の否定的な態度を表す場合と共通していると考える。

勧誘・意志法「してしまおう」や命令法「してしまえ」、その他のさそいかけ表現が述語にくる文の場合では、否定的な感情・評価ではなく、話し手の肯定的な感情・評価が表されており、話し手の動作の実現に対する意志の表明や希望、聞き手への動作のうながしや指示としてはたらいている。否定的な感情・評価の例はない（もしくは稀である）、という点で話し手の態度は＜ものがたり文＞とは異なる傾向であると言える。勧誘・意志法では基本的には話し手にとって、命令法では聞き手にとって、その出来事の実現が困難、面倒な状況であるということを示し、このことからシテシマウの＜まちのぞみ文＞、＜さそいかけ文＞の場合も、＜ものがたり文＞が表す＜意外性＞という意味とつながることを述べた。

4. おわりに

非日本語母語話者に対する日本語教育の中で、このシテシマウという形は多くの初級レベルの教科書で取り上げられ、基本的な文型として教えられている。例えば、『みんなの日本語（第2版）』（スリーエーネットワーク）では、シテシマウを「動作の完了」と「話し手の後悔や残念の態度」を表す表現としてそれぞれ別の用法として解説や練習活動に提示されている。その他の教科書でも、意味や用法の解説は多少異なるが、文の

終止のシテシマウの例では否定的な感情・評価を表す例が挙げられているものがほとんどである。一方、日本語上級レベルの学習者の中でも、この表現をあまり使わないという人は少なくない。理由としては、動作の完了を表すことだけを言いたければ、シタ形でも用が足せるし、またこの形式が＜後悔＞のような否定的な態度を表してしまうということから、そのような態度をどんな時に表明すればよいのかよくわからないために、あえて使わないようにするといったことが挙げられるようである。今回の調査でも示されたように、シテシマウは肯定的な態度を表す場合にも用いられるし、さそいかけ文でも用いられる。なぜ否定的な態度を表す用法もあれば肯定的なものもあるのか、なぜ＜完了＞と＜後悔＞のレベルの異なる意味が１つの形式に存在するのか、このようなことも指導の際に必要に応じて提示することができれば、学習者の理解の助けにもなり、学生は学んだ表現の使用の幅を広げやすくなるのではないだろうか。

今回は、文の終止の位置に使用されるさまざまな形のシテシマウのムード的な側面について実例を用いて述べてきたが、BCCWJ-NTで得られた膨大な量の用例すべてを丁寧に分析できたとは言い難い。シテシマウという形は、動作・変化・状態の実現に対する話し手の態度を表しているが、先行研究では、場合によってムード的な意味の表れ方に強弱があるという指摘もあり（藤井1992：25-26）、その点についてはアスペクト的な側面や動作主の意図性の有無などとの相互作用を調べながらこの形の表す意味をさらに検討しなければならない。シテシマウには「してしまっている」「してしまっていた」等のアスペクト的なバリエーションも存在するが、これらのアスペクト的な形がどのような意味を表しているのかも調べることで、ムード・アスペクトの複合的な性格をもつとされるシテシマウの意味・機能がさらに明らかになるだろう。

---

[1] 藤井（1992）では、従属文（つきそい文）のシテシマウの意味について、単文（ひとえ文）の述語のシテシマウよりも、従属文のほうがアスペクト的な意味が積極的に表れるということを指摘している。本稿では、アスペクト的な側面についての分析は行わなかったため、アスペクト性が強いとされる従属文の述語のシテシマウについては、調査・考察の対象から除いた。

[2] 本稿でいうムード的な意味とは、シテシマウを述語にする文のモダリティーの要素の一つである。

[3] 文の通達的なタイプの一つで、話し手がありのままの現実をありのままにものがたる文（奥田 1984：231）のこと。話し手が現実の出来事を確認してのべたてる文のことである。

参考文献

(1) 奥田靖雄（1984)「文のこと」(言語学研究会編『ことばの研究・序説』むぎ書房 1996 に所収)
(2) 一色舞子（2011)「日本語の補助動詞「 - てしまう」の文法化 ： 主観化、間主観化を中心に」『日本研究』第 15 号，高麗大学日本研究センター，pp. 201-221
(3) 金田一春彦（1954)「日本語動詞のテンスとアスペクト」(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 1976 に所収)
(4) 工藤真由美（1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房
(5) 杉本武（1991)「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学部紀要（人文・社会科学篇)』4，pp. 109-126
(6) 杉本武（1991)「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ（２)」『九州工業大学情報工学部紀要（人文・社会科学篇)』5，pp. 61-73
(7) 鈴木重幸（1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
(8) 鈴木智美（1998)「「～てしまう」の意味」『日本語教育』97 号，pp. 48-59
(9) 高橋太郎（1969)「すがたともくろみ」(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 1976 に所収)
(10) 寺村秀夫（1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
(11) 新田義雄（1999)『日本のモダリティと人称』ひつじ書房
(12) 藤井由美（1992)「「してしまう」の意味」言語学研究会編『ことばの科学 5』，むぎ書房，pp. 17-40
(13) 守屋三千代（1994)「「シテシマウ」の記述に関する一考察」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』6，pp. 49-70
(14) 吉川武時（1973)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 1976 に所収)

使用コーパス

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (通常版)』　オンライン版「中納言」
https://chunagon.ninjal.ac.jp/

(琉球大学留学生センター)

The Modal Meaning of *Shiteshimau*

TOMARI Seiko

Keywords: *Shiteshimau*, Modal meaning, Unexpectedness, Person, Tense

Abstract

This paper focuses on emotionality and evaluation in the modal aspect of the "*shiteshimau*" form. Firstly, emotive and evaluation characteristics expressed in sample sentences are identified. Such characteristics are influenced by moods, type of person and tense. While negative moods such as distress, regret and confusion can be seen in predicative moods used in the construction of narrative sentences, predicative moods are also used to express positive attitudes such as happiness and satisfaction. In the case of volitive moods used in optative sentences and imperative moods used in hortative sentences, affirmative attitudes that assert the desirability of the attainment of a certain outcome are used to encourage or instruct the listener. From the perspective of tense, this paper finds that there are more sample sentences that employ non-past tense forms in expressing negative attitudes such as admonishment, criticism and dissatisfaction, as compared to those that use the past tense form. Upon examining the various attitudes expressed by the "*shiteshimau*" form, this paper states that the common modal meaning shared within this form is *unexpectedness*. While unexpectedness is generally an evaluation in relation to perceived truths in sentences uttered by the speaker, this study finds that the speaker can also express unexpectedness from the standpoint of the listener or third-person in second-person and third-person sentences.

(University of the Ryukyus)